

第十四講 まとめ：講評とその後に来るもの

講評：シュメール人の国家・社会のモデルについて紹介・説明せよ

この課題で幾つかのレポートはウバイド期からイシン・ラルサ期に至る南部メソポタミア史を概観するものや、メソポタミア地方の自然環境からこの地における農業の特徴について論じるもの、バウ女神領の行政経済文書に見える社会組織と身分について解説していたが、これは問題の主旨から外れている。

多くのレポートはマルクスの国王国土総有説、ウェーバーの封建制論、ダイメルとシュナイダーのマルク共同体論、ジェイコブセンの原始民主政論、ディアコノフのノモス共同体論を挙げ、それぞれのモデルについてその内容を解説していた。しかしそれらのモデルの有効性についての議論が欠けている恨みが残る。

いくつかのレポートは部分的にこれらのモデルの有効性について論じていた。マルクスのモデルは土地売買の記録と整合しないことや、ダイメルとシュナイダーのモデルはラガシュという都市国家の狭いバウ女神領のデータに依拠していることジェイコブセンのモデルは神話を素材にし、既にウルク期のタブレットに王を表す文字が観られるという事実と整合しないということ等に言及することによってモデルの有効性を評価しようという姿勢を鮮明にしているものもあった。

その後に来るもの：アッカド帝国とウル第三王朝

ルーガルザゲシの帝国（前 2340-2316 年）

ウンマのエンシ

ラガシュ撃破 前 2340 年頃

↓

南部メソポタミア征服・・・50 の都市を支配

ウルクに遷都

ニップール占領

↓

「国土の王 Lugal kalam ma ki」を名乗る
北部経略：キシユ攻略（前 2318 年頃）
地中海沿岸に進出
サルゴン（シャル・キン）を利用：その間南部征服に集中
↓
ウグバンダの戦い（前 2315 年頃）
ルーガルザゲシの敗北とその帝国の滅亡

アッカド帝国（前 2318-2190 年頃）

サルゴン（シャル・キン：前 2334-2279 年頃）

シャル・キン：「真の王」という意味

○ 伝説によると・・・

キシユ王ウルザババの宰酒長

王権奪取：王を裏切り、ルーガルザゲシに内通

↓

アッカド（アガデ）建設

○ セム系

弓兵主体の機動部隊

○ 初期・・・ルーガルザゲシに服従

3年目 北方遠征→シリア

↓

ルーガルザゲシの帝国戦略の一端を担う

ルーガルザゲシに警戒感を抱かせる

↓

対立

○ ウルク奇襲・破壊

ウグバンダの戦いでルーガルザゲシと 50 人のエンシの連合軍を
撃破

ニップールのエンリル神殿にて「全土の王」「シュメール・アッカ
ドの王」を名乗る（前 2315 年頃）

南部制圧

ウル、ラガシュ、ウンマ→「その手を海で洗った」

↓

ペルシア湾貿易の独占

「メルカの船、マガンの船、ティルムンの船をアガデの港に停泊せしめた」

南部支配

各都市のエンシ（都市長官）や高官←アッカド人任命

- 西北方遠征～シリア（治世 11 年目 前 2207 年）

ユーフラテス川沿い→トゥットウル→マリ→イアムルティ→イブラ→杉の森（レバノン）→銀の山（タウロス山脈）

↓

シリア、レバノン、小アジア東部を支配圏内

木材の大量流入

- プルシュカンダ（小アジア東部）のヌル・ダガルを屈服
- 「上の海（地中海）の向こうの地」→アナクとカタプラ（クレタ）

征服

帝国の支配

官僚制：各都市のエンシ・・・アッカド人・・・直接支配

属国

常備軍：5,400 名

弓兵主体の軽装機動歩兵軍

貿易活動の独占

小アジア・・・銀

シナイ半島・・・銅

メルカ・・・金

マガン・・・石材

レバノン・イブラ・メルカ・・・木材

リムシュ（前 2279-2266 年頃）

南部とエラム、ティグリス川沿いの地域の反乱

宮廷クーデタ

マニシュトゥス（前 2266-2252 年頃）

帝国内の反乱

↓

北と北西向けの貿易ルート回復

東：アンシャンとエラム撃破

南：海の彼方の 32 王の連合軍撃破

宮廷クーデタ

ナラム・シン（前 2251-2215 年頃）

キシュとシツパルを中心とする大反乱

↓

領土拡大

（1） マガン遠征・・・南アラビアまたはアフリカ

（2） マリ～トルコ領クルディスタン

（3） シリア

（4） カップパドキア

↓

国境の安全確保

スバルトゥとエラムを制圧

ルルビア人遠征

内政

アッカド人官吏重用

駐屯軍の増強

統一的暦年制度

度量衡の統一

ナラム・シンの神格化

末期

長年の飢饉

グチ人の平野部進出

大反乱

シャルカッリシャッリ（前 2217-2193 年頃）

首都をかろうじて防衛

エラムとスバルトゥ独立

諸州離反

↓

北東との貿易路断絶

南のシュメール都市離反

グチ人との戦い

↓

アッカド帝国の崩壊（前 2190 年頃）

グチ人（前 2190-2120 年頃）

アッカド、ウル、ウルクの征服と破壊

アッカドの完全破壊（前 2151 年頃）

アッカド地方に盤踞：各王相互に対立 21 人—平均 5 年

同盟体制

漸次アッカド人と同化

南部の独立：ウルク・ラガシュ

ティリガン（前 2120 年頃）

南部の反乱（ウルクのウトゥヘガル中心）

ドブルムの戦い

ウルクのウトゥヘガル（前 2120-2113 年頃）

「世界四方の王」

帝国組織の再編・・・自己の官僚

ウルク市民の派遣

ウル第三王朝（前 2113-2005 年頃）

ウルナンム（前 2113-2096 年頃）

「シュメールとアッカドの王」

国土再建と社会政策

遠征・・・不明

↓

法典編纂

窃盗・反逆禁止・貧者保護・統一度量衡の制定

運河開削・農業の改良・神殿建設

シュルギ（前 2096-2049 年頃）

ウル領の拡大

エラムとアンシャン征服

アッシュールを属州化

ティグリス川東部のアッシリア・エラムの中間地帯を併合

ルルビ人他、山岳民を討つ

↓

アッシリア人商業居留地（アナトリアと北シリアに広がる）を支配

重要貿易路を確保

帝国支配体制を確立

中央集権的官僚組織

地方の知事 ensi

定期的に移動

税金の徴収・首都への報告

各州の軍隊

王に直属する駐屯軍司令官の指揮下に置かれる

常設の王室走者隊員（情報伝達員）

国庫

ニップールの南側

各都市の貢納物貯蔵

緊急用

A.K. Grayson, *Assyrian and Babylonian Chronicles* (1975)

- 「(1) サルゴンはイシュタルの統治の間に権力の座に就きそして
(2) 彼には敵対するものも対等なものもいなかった。彼の輝きは、諸
地域の上に
(3) 広がった。彼は東方で海を渡った。
(4) 11年目に最果ての地に至るまで西方の地を征服した。
(5) 彼はその地をひとつの権力のもとにもたらした。彼はその地に自
らの像を設置し
(6) 屋形船に乗せて西方の戦利品を渡した。
(7) 彼は十時間間隔で彼に仕える宮廷の役人を駐筈させ
(8) 各地の部族を統一して統治した。
(9) 彼はカザッルに攻め入りカザッルを瓦礫の塊に変えてしまい、
(10) その結果一羽の鳥の為の止まり木さえ残されなかった。
(11) その後、その晩年に、すべての地方が再び反乱を起こし
(12) アガデの町の中に彼を包囲した。サルゴンは討って出て彼らを打
ち破った。
(13) 彼は彼らを打ち倒し彼らの大軍を打ち負かした。
(14) のちに、スバルトゥがサルゴンを攻め彼を武装させた。
(15) サルゴンは待ち伏せをし彼らを完膚なきまでに打ち負かした。
(16) 彼は彼らの大軍を撃破し
(17) 彼らの資産をアッカドに送ったのである。
(18) 彼はバビロンの堀の土を掘り上げ
(19) バビロンをアガデに次ぐ都市とした。
(20) 彼が行なった悪事ゆえに大神マルドゥクは怒り給い彼の家族を飢
饉によってぬぐい去ってしまわれた。
(21) 東から西に至るまで、従属民たちは彼に対して反旗を翻し
(23) マルドゥクは彼を不眠症で悩ました。 - - - - -
(24) サルゴンの子、ナラム・シンはアピシヤに進軍した。
(25) 彼は町の壁に穴を穿ちリシュ・アダドを
(26) アピシャルの王を、そしてアピシャルの大臣を捕らえた。

(27) 彼はマガンに行軍しマガンの王マンヌ・ダンヌを捕らえた。」